

# 午後10時00分 第一滝本館社宅浴場前



浴場の前で待っていると、戦いを終えて芯から体を温めた男たちが、続々と出てきた。その表情は、誰もがどこかすがすがしい。しばらくして古本さんが出てきた。すっかり温まった体からは、ほかほかと湯気が立っている。

「おめでとうございます」  
そう声を掛けると、古本さんは最初に会ったときと同じ笑顔で「ありがとうございます」と穏やかに言った。



「勝つことができ、本当にうれしかったです。きっと今年はいいい年になると思いますが」と、今夜の感想を語る古本さんの瞳は、燃えたぎるような闘志ではなく、そよ風のように爽やかな達成感で満ちている。

「それじゃあ」と、われわれに向かつて控え目に会釈をすると、戦いを終えた戦士は、仲間とともに勝利の美酒に酔いしれるため、夜の温泉街へと消えていった。

# 取材を終えて

1年で最も気温が下がる2月の夜。何枚靴下を重ねても、つま先は氷のように冷たく、指にはちぎれそうなほどの痛みが走る寒さの中、下帯姿の男たちとさらし姿の女たちが、威勢よく雪の中を駆けてくる。

その姿を見ると、心の奥がカッと熱を帯びるのを感じます。氷点下8度の寒さの中、誰に強制されたわけでもなく、彼らはこの戦場へと、体一つでやってきます。

『源泉湯かけ合戦』が始まると、突き動かされるように湯をくみ、放り投げ、走り、吼え、体全てを使って、感情を爆発させる彼らのその姿が、私には輝く命そのものに見えるのです。

彼らを駆り立てるものはいったい何なのか、そこで彼らは何を感じるのか。コートを着込み、外から戦場を覗いている私たちには知る由もありません。

しかし、この戦場で彼らが見せる輝きは、真冬の夜に300人以上の足を止め、その目をくぎ付けにするだけの確かな力があるのです。

それは、彼ら一人一人の力であり、この『のぼりべつ』のかけがえのない力です。

来年の2月4日は、ぜひその目で、その力をごらんになってみてください。

